

「あいさつができない子」は、損をする

あいさつができない子どもはどうなるのか。

早稲田大学系属早稲田実業学校初等部教諭、岸啓介さんは『学力は「ごめんなさい」にあらわれる』（筑摩書房）の中で「相手がどう感じるかより、自己中心的に物事を捉えることを優先してしまう。言葉遣いも乱暴になり、友人関係にも悪影響を及ぼすだろう」といいます。

すべての人間関係は「あいさつ」から始まる

子どもの成長を一つの軸として「あいさつ」という言葉の意味と価値を考えてみてください。もはや欠かすことのできないものという感覚も理解できると思います。なぜなら、あいさつは「すべての関わりのはじまり」だからです。

子どもは多様な関係の中で学んでいきます。だから、あいさつは「特定の誰か」だけではなく、むしろ「まだ知らない誰か」にしてこそ可能性が広がるものです。もちろん、安全面の環境を配慮した上でのことです。

誰とでもやりとりができる子どもは、人から学ぶことの価値を知らずのうちに学んでいます。こういう子どもは顔を突き合わせてうなずいたり、嬉しそうに相槌をうったりと共感的に相手に近寄ろうとする姿勢が感じられるのです。（授業中でもこういう子どもがいて嬉しいものです）相手が薦めてきたことに、おもしろがって挑戦してみることで世界を広げています。

もちろん内向的な性格だったり、話下手だったりして人と接することを不得意としている子どももいます。いつも保護者の後ろに隠れている子どもを想像してみてください。子どもらしいと言えそうなかもしれませんが、人とのやりとりに躊躇してしまう子どもに対して、「うちの子は恥ずかしがりやだから」という昔からの決まり文句があります。たしかに、人との関わりが苦手なことは事実としてあることでしょう。しかし、それを理由に他者との接触を保護者が妨げるようなことがあれば、それは子どもの成長を放棄しているのと同じです。

挨拶をしないことによる損失

自分から率先して挨拶するのに恥ずかしさを感じることもあると思います。胸の内では、相手の存在を気にしながらも、思わず素通りしてしまうこともあるかもしれません。友だちの手前、余計に行動しづらいこともありますよね。でも、まだ見ぬ一人ひとりが自分の将来に関わっているかもしれないと思うと、人と関わらないことは損失に思えてくるはずですよ。上手にあいさつができる子どもは、チャンスをつかめる子どもでもあることを忘れてはいけません。

小さな子どもには「あいさつ」を「成長へのきっかけ」という観点から教えるべきです。人と関わることで、かけがえのない出来事にも感じられてくるのではないのでしょうか。

あいさつの価値の大きさは、大人であっても変わりません。たった一回の「こんにちわ」で生まれた接点が新しい仕事につながったり、運命を左右する出会いであったりすることもあります。場合によっては、人生をともにする伴侶を見つけるきっかけにもなるはずです。

つまり、「こんにちわ」というあいさつの価値は、その人自身がつくるとも言えるのです。出会いという観点から見ると、あいさつにはまだ可能性があります。

新たな交流が人生を大きく好転させる

今は身近に感じられなくても、出会いたい人は意外と近くにいるということになります。信頼する友人を通じて、誰かを紹介してもらうような経験がある人もいるでしょう。たった一人との出会いが、次の出会いにつながっています。新たな交流によって、自分の人生が大きく好転していくことが事実としてあります。仮に、「あいさつ」をきっかけに人生が変わった経験をした大人がいれば、その人にとっての「あいさつ」は「運命を変えるかけがえのないもの」となります。決して、ただの儀礼的なやりとりとは考えないはずです。

あいさつを「話したくもない人に向けた形ばかりの苦痛なもの」と考えている人（あいさつ不要論者）とは、全く違う捉えになると思います。同じことばであっても、学んできた背景によって、見える景色は

異なります。価値観は人それぞれです。どちらがいいという判断を簡単に下すことはできません。ただ一つ言えるのは、言葉の意味や価値を増やしていくことは、言葉を通して物事を多面的に見ることにつながると思うのです。こうした見方ができる人のことを「大人」と呼ぶのだと考えています。

あいさつ習慣のない子どもはどうなるのか

あいさつをする習慣が築かれている子どもは、相手意識が育まれている子どもとも言えます。相手意識は「聞くこと」の土台でもあります。人とつながって世界を広げたいという想いは、声や表情などの仕草にはっきりと表れます。あなたにとってあいさつが印象に残る子どもがいたとしたら、その子はもう自分の力で未来を切り拓いている証拠です。進んで頭を下げたり、声をかけたりするのは、人への関心があれば難しいこともあります。だからこそ、人と通じ合うことに喜びを感じた経験があるかどうかは、子どもの成長に大切だといえるでしょう。

反対に、あいさつの習慣がない子どもは、相手意識が希薄な場合が多いものです。相手がどう感じるかを考えるよりも、自己中心的に物事を捉えることを優先してしまいます。こうした子どもは、言葉を上手に使うことにも慣れていません。だから当然、言葉遣いにも課題が見られます。

「やばい」、「きもい」、「うざい」、「えぐい」、「だるい」、どんな会話であっても、たいていこれらの言葉で済ませてしまうことが日常の習慣になっている子どももいます。中・高生であれば一度は使ったことがあるでしょうか。もはや違和感がないかもしれません。一方で、子どもの成長という側面から考えたときに、乱暴な言葉遣いはマイナスに働きます。

言葉遣いが友人に大きく影響する

もちろん「品がない」、「イメージが悪い」といった印象の問題もあるかもしれません。しかし、他者からの心証がよくないということ以外に、別に懸念事項が生じてきます。

それは、「友人関係」の問題です。人と人との関係は、言葉の意味と価値を同質のものとして扱う者同士の方がうまくいくものです。先述の「あいさつは話したくもない人に向けた形ばかりの苦痛なもの」という価値観であれば、これに共感できる者同士の方がコミュニティを形成しやすいでしょう。土台となる物事の見方や考え方が合うのですから。だから、言葉遣いが汚い人との時間が長くなれば、思考や行動パターンも自然と似てきます。仏教の教えの中に「悪友を避けて善友を求めよ」というものがあります。近しい間柄になれば、人は必ず影響を受けるものです。だから、付き合う人を考えなさいということですね。逆もまた然りで、自分自身が人に与えている影響も当然あります。あなたに近寄ってくる人は、あなたの言葉遣いや振る舞いを見ながら判断していることになります。

言葉遣いは人間関係づくりに大きく関係していることが分かります。つまり、言葉を発することは「自分の言葉遣いを好ましいと感じる人との接点をつくること」を意味しているのです。

思考を貧しくする

言葉遣いの問題は、それだけにとどまりません。話す言葉に意識が及ばなくなると言葉を発するときの思考プロセスにも問題が生じます。

本来、コミュニケーションは、言葉の遣い方に細かい配慮が求められます。同じ内容のやり取りであっても、異なるAさんとBさんとでは発する言葉は、一律にはならないはずで、それは性格や人柄の違いかもしれないですし、体調や精神状況の差かもしれません。絶好調の人と落ち込んでいる人、社交的な人と内向的な人とでは、かける言葉も内容も変わりますよね。相手の様子や場の雰囲気を感じ取りながら、適切に使うべき言葉を吟味することでしょう。相手の立場や身分、置かれた状況をふまえるというのは、「よりふさわしい言葉」を自分なりに判断して使うということです。その場に応じて「今の状況はこの言葉を使うべき」、「この人だったら、こう言おう」と常に考えながら話すことになります。

「やばい」が子どもの成長を奪っている

人とのやりとりでは、頭の中で言葉を選ぶ瞬間が必ずあるものです。その選択肢の幅は、語彙力の問題だけではなく、適切に状況を読み取る力にも左右されます。質の良いコミュニケーションは、繊細な言葉選びとセットなのです。言葉を使うときに一切の状況をふまえないのは、残念ながら「何も考えていない」ということになります。

「やばい」という言葉は便利なものです。肯定的な意味でも否定的な意味でも使うことができるからです。しかし、あらゆる場面で使うことができるということは、結局は状況を考えずに使ってしまうがちです。つまり、話し手が思考する場面が少ないのです。これが一律に言葉を使うことの弊害です。

子どもの言葉遣いを正す意図は「コミュニケーションを通じて思考する場面を増やす」という点にもあります。人とやりとりをするたびに、場にふさわしい言葉を選んでいる子どもとそうでない子ども。両者の間には、「考える」という経験の積み方に、はっきりとした差が生まれるのです。

まなび野洲チャレンジ！ 38

今回はこの問題です。正しい答えの番号はどれでしょう。
答えは、最下段に載せています。

まめがらたいこ

豆殻太鼓の説話で知られる圓光寺は、野洲市久野部に
ある寺院です。

圓光寺にある太鼓の胴は豆殻で作られています。昔、こ
の里の久野七郎とその使用人に豆をまかせたところ豆では
なく違った木が生えてきました。そこで一心に祈るとその
木は大木になり、三石六斗（648 リットル）の豆がとれ
ました。



〇〇がまつられている本堂



せきぞうきゅうじゅうのとう
石造九重塔

これは観音様のお力によるものだとし、その大木を太鼓の胴に
して観音様に奉納したという伝説が残っています。豊作の喜びを永
久に伝えたい願いが豆柄太鼓の説話を生んだといわれています。

市内の和菓子店では、豆殻太鼓にちなんだ「太鼓もなか」が販売さ
れています。

また、圓光寺には、国指定の重要文化財に指定されているものが3
つあります。

一つは、本堂です。「^{ながれつくり}流造」という様式で、正面の屋根だけが前
に反り返るように長く伸び、横から眺めると「へ」の字」のようになっ
ていて寺院建築としては珍しいものです。二つ目は、^{せきぞうきゅうじゅうのとう}石造九重塔、
そして、三つめは本堂にまつられている平安時代作の〇〇です。

さて、〇〇に入るのはどれでしょうか？

- | | |
|------------|------------|
| ①十一面観音立像 | ②毘沙門天（多聞天） |
| ③木造阿弥陀如来坐像 | ④帝釈天 |

おすすめの1冊



『見るだけでレベルアップ！ こんこ先生の「型」でつかむ板書術』
平垣 聖大 著 樋口 万太郎 監修

出版社 学陽書房

板書が苦手な先生がイチから真似できる必読本！

短時間で授業と板書の準備ができる方法を紹介しています。

こんこ先生の実際の板書の見本が解説とともにフルカラーの図
版で大きく掲載されており、とてもわかりやすい1冊です！

- 1章 授業を変えたい！ 板書を変えたい！ と思ったら
- 2章 実例を大公開！ 「型」が思考を助ける！ 国語科の板書術
- 3章 基本の「型」で授業がスムーズに！ 算数科の板書術
- 4章 「型」で子どもの理解が進む！ 理科の板書術
- 5章 「型」で子どもの考えをまとめ整理する！ 社会科の板書術
- 6章 番外編！ いろいろな場面で使える板書術】